

# 地域交流センター通信

Chiiki Kouryu Center Tsushin  
2004 December

# 06

特集

# つる子どもまじりの 歴史に学ぶ

巻頭言 世界と子ども

ワールド・ミュージアム

附属図書館ビオトープ

現職教員教育講座

地域の声／トピックス





# 世界と子ども

## 大田堯

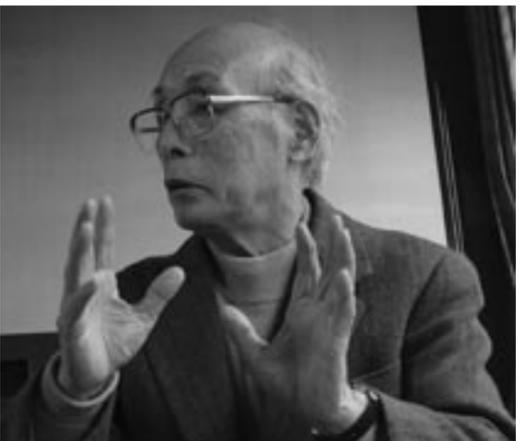
一九八九年は、いわゆる東西冷戦の幕引きを象徴する「ベルリンの壁」崩壊の年ですが、同時に大人と子どもとの壁を破る、『国連子ども権利条約』が成立した年でもあります。

一九七七年来日したミヒャエル・エンデに興味深い発言があります。「児童文学はヨーロッパでは、大人の世界が子どもたちの住む場所でなくなり、かけ離れてしまったときから始めて出来ました。冒険があったり魔法があったりといった、子どもたちの〈保護区〉みたいなものをつくって、その中で遊べるようにしたいところから、児童文学が始まったと思います。私は……（中略）……大人も子どももいつしよの世界をつくるべきだと思うのです」（岩波書店『図書』一九九七年三月号）

つまりエンデは、ルソーらの「子どもの発見」以後にもかわらず、児童文学の成立を、大人と子どもとの間の新たな社会的壁ができあがっている現実の証（あかし）とらえているのです。たしかに、ヨーロッパにかぎらず、日本のような北の「豊かな国」では、子どもは「保護区」の中に収容された「失業者」、社会的役割を失った存在になっています。

いまの日本の子どもたちの直面する問題は、市場経済優先の社会にあつて、人びとが自己中心で、孤独に引き裂かれ、新しい市民連帯を創出しかねている社会状況の中で、ひとなる、\*ことへの並々でない苦悩の中にあることです。所在を失い、自己行方不明という深刻な人間の危機にあると云えるでしょう。動機不明の児童虐待の対象ともなっています。これが、世界の総所得の八〇％余を占

\*大田氏は、子育ての習慣の調査研究で接することになった「ひとなる（人が人になる）」「人なす（人を人にする）」ということばを、思想的なものとして注目してきた。そのこととも関連して、「引き出す」という意味をもつエデュケーション（education）を「教育」と訳すのは「誤訳」ではないか、とも述べている（『月刊社会教育』二〇〇四年一月号、国土社）、（注記・編集長）



▲広島県本郷町の子ども図書館勉強会にて（2001年12月5日、今泉吉晴氏撮影）

める二〇％足らずの数少ない最も富める国の子どもたちがおかれている状態です。

他方、一日二ドル以下の生活を強いられている人びとは、世界で二八億と云われていますが、大部分が南の国に属します。その子どもたちは、飢餓、貧困の中にあり、加えて絶えざる紛争、戦禍のもとでの難民、それどころか、おそらく北から輸出された武器をもって駆り出されるといふ姿が見られます。「子どもの権利条約」どころか、生存そのものを脅かされてつづけているのです。ユニセフ白書では、地球上で一日三万五千人、年間一三〇〇万の子どもの命が、ごく普通の薬品、治療さえあれば守りうるはずなのに、失われているとあります。都市に職を求めてあふれ出たスト

リート・チルドレンも、全世界で三〇〇〇万、多くは南の国の子どもたちです。

こうした過酷な事実に対して、私たちが日々享受している富は、無関係なのでしょう。世界を席捲（せきけん）する市場経済の滲透（しんとう）によって、南北の生活格差はますます開いていく構図になっています。北の富める国の資本は利潤獲得が基本的な目的ですから、南を援助する場合であっても、結局新しい市場開発、南にある化石資源の利権の獲得をめざします。イラク戦争の陰にも、その意図が垣間見られます。まして、武器輸出をする北の先進諸国では、「死の商人」たちが、戦禍の「恩恵」に浴する期待をいんでいるはず。す。

こう思うと、北の国の子どもたちも、貧しい国の子どもたちも、大人と子どもとの壁を破る『子どもの権利条約』のもとにあるとはいえ、その精神の実現は私たち大人、とりわけ豊かな国にある私たちが、南北格差を少しでも縮小するように、日々の生活の在り方から見なおすほかはないと思えます。

私はたまたま八月のお盆の頃の一週間、地域のゴミ収集所の当番をやりました。その日は缶とびんの収集日で、収集所に出かけてみると、主にビールの空缶が山のように出されていました。あきれ見上げてみると、近くの町工場の主人が出てきて、「大変だね」と同情の声をかけてくれました。彼の云うことでは、アルミ缶は作るのに大量の電気を使うこと、直接商品名など書き込んだものは、再生してもいいアルミを得られないとのこと。し

た。そして、改めて私に「日本はどうなるんでしょう」と尋ねるのでした。私は思わず答えていました。「L」びるでしょう」と。むろん無責任な応じ方だとすぐに反省しました。「どうなるか」の間そのものも問題です。「どうするか」を共に考え合うような対応をすべきだったのです。

「どうするか」も、身近なところからやるほかありません。電気エネルギーや紙資源の節減、ゴミの分別、再生など、ちょっとした配慮で可能。それらに子どもたちの参加もえられるでしょう。アジアの百万人分の一日分の食糧が、東京都では毎日捨てられているという報告もあります。私がかときどき測る土曜日の朝日新聞、本体は四百グラム足らずですが、はさまれたツルツル紙の広告を加えると、ときに一キロ近くの重さになります。広告のほとんどは消費のすすめ、日本人の欲望肥大をおおっています。食生活その他消費の在り方など、南北の壁を克服するのに、子どもたちの参加で、子どもたち自身で「保護区」脱出の機会をつくるのが出来るでしょう。

エンデが、時間やマネーを、現代社会の基本課題とした作品、例えば『モモ』と『ハーメルンの死の舞踏』などは、まさに大人と子どもをつなぐ新しい文学です。文学だけでなく、私たちの日々の生活の中で、南と北を結びつけ、地球上の生命体の全体を視野に入れて、子どもたちと協力し合うことにとどめたいものです。それが『子どもの権利条約』を、地球上の人類全体のしあわせにつながる一端ともなるのでは、と思えます。●

おわた たかし  
元都留文科大学学長・東京大学名誉教授・日本子どもを守る会名誉会長

著書：『教育とは何か』（岩波新書）、『教育とは何かを問う』（岩波新書）、『生命のきずな』（偕成社）、『わたしたちの教育基本法』（埼玉新聞社）、など多数、とくに『自分を生きたる教育を求めて』（二ツ橋書房）は、その大半が都留文科大学学長としての「実践記録」＝思想の展開として構成されており、都留文科大学関係者の必読の書といふべきものである。また『地域の中で教育を問う』（新評論社）には、『都留自然博物館』構想を提示した文章も収められている。（著書紹介・編集長）

## 「つる子どもまつり」 の歴史に学ぶ

今年も五月の第三日曜日は、大学構内が子どもの笑顔で溢れかえりました。『三五回つる子どもまつり』が行われたからです。『つる子どもまつり』は都留文科大学の学生と市民とで実行委員会を組み、運営されているおまつりです。私は今年で三年目の参加になりますが、『第三五回』とあるように、この『つる子どもまつり』自体はなんと三十五年も続いているのです。そもそもの始まりは、世の中がまだ高度経済成長の真只中にあつた一九六九年のことでした。日本にはさまざまな経済的繁栄が訪れましたが、その過程には文化の画一化や教育の多様性の欠如といった負の側面があつたのも事実です。そういったことを背景に、都留文科大学の学生が『戦争で一番被害を受けたのは子どもではないか』『子どもたちを守るう』と立ち上がったのです。当時彼らは学生運動のうねりにも大きく影響されていたようで、そういう社会的機運もあり、とにかく、熱く立ち上がりました。初めの年は学生だけで行つたのですが、その年の反省で、「都留市の子ども文化状況を良くするためには、私たちだけでなく都留市の子ども、父母、教師をはじめとする市民と学生が一体となって進めてこそ、本当の発展があるのではないか」ということが言われ、次の年から都留市の市民と学生とが共に子どもまつりを作るようになりました。

## 三五回目を迎えた 「つる子どもまつり」

小林愛奈

その後しだいに盛り上がり、第八回子どもまつりの時にはなんと二四〇〇人も子どもが大学構内に来たそうです。しかし、子どもまつりが盛り上がっていく一方で、おまつりをただ行うだけではなく、『つる子どもまつり』はどのようにあるべきかということも延々と討論し続けられていきました。そして幾度となく重ねた話し合いにより、子どもまつりが向かう方向が見定められてきました。それは、『子どもたちに地域の中で健やかな成長を遂げてほしい』という想いです。この考え方は、今でも私たちの重要な活動の目的として大切に引き継がれています。毎年、この想いに基づき子どもまつりの意義を話し合い、企画を考えます。子どもまつりには定番の企画が二つあるのですが、一つは午前中の『くに企画』というもので、子どもたちにたくさんさんの企画を好きに回してもらいます。二つ目は『みんなの広場』という午後に行う企画です。グラウンドで、来てくれた人全員で遊びます。一〇〇人単位の子どもたちがグラウンドを駆け回る光景はなんともいえ、ただ圧巻です。今年の後者の企画として、例年とは違う雰囲気にし、企画にストーリーを組み込みながら鬼ごっこに似た創作遊びをしました。ストーリーに夢中になり、子どもたちの生き活きとした顔があちこちに溢れていて胸が熱くなりました。このように、毎年五月は大学が「子どもの世界」になります。ただ、私が子どもまつりに関わって感じることは、良いことばかりでなく、長く続いているということでも窮屈だと考えることもあり。準備が大変だ」と、正直投げ出したくなる時もありました。しかし、そのようなときには必ずさまざまな人の顔が



都留文科大学のグラウンドにて

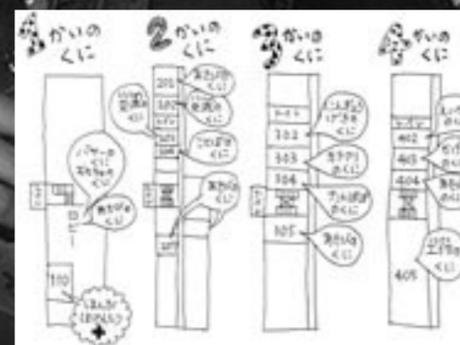
「大学」というところは、学生たち一人ひとりがそれぞれの青春を刻み、去っていく場でもあります。「つる子どもまつり」は三五年間も受け継がれており、多くの学生たちの情熱が注ぎ込まれてきた一つの舞台です。それは児童文化研究部の活動の一部として生まれましたが、毎年多くの学生が参加し、都留の市民に支えられながら回を重ねてきました。その経験は、都留文科大学と地域住民との本格的な交流の歴史そのものでもあります。そこには、考えるべき大事な価値がさまざまに含まれているでしょうが、求心点には、「子どもたち（＝新しい世代）の生活と成長をめぐる問題」に関心を寄せるといえることがあるように思われます。「子ども（たち）」という存在が、多くの人びとを結びつけ、交流と希望を生み出してきているのです。この、学生たちと市民とによる子育ての文化運動は、教員養成を柱にしてきた都留文科大学の構成要素になってきていると思います。「つる子どもまつり」を特集し、その事実から地域交流の意味や課題を考えてみたいと思います。

## 特集

# つる子どもまつり の歴史に学ぶ



さまざまな感想が寄せられた子どもまつりのアンケート



さまざまな「くに」。今年のパンフレットより

浮かびます。子どもの顔はもろろんのこと、普通の大学生を送っていたら知り合えないであろう沢山の市民の方々、それに子どもまつりに参加してくれる学生のみんな。いろんな交流があり、そのどれもがかけがえない時間です。そういう意味では、私は自分のためにこの活動をしています。私は、いや、私たちは、この『つる子どもまつり』がもたらしてくれる、暖かいものを、を絶やさず、想いをつなげていきたいです。

こばやし あいな (本学国文学科三年・つる子どもまつり事務局)

# 「つる子どもまつり」を支えて

## 「学生たちとの交流の年月を思う」

遠藤静江

はじめに

つる子どもまつりが産声をあげてから三十五歳になりました。

三十余年を共に歩んできましたが、つい昨日のことにようにも思えます。当時実行委員だった学生が教職につき「校長になりました」という便りをよこすと、感慨深いものがあります。

つる子どもまつりの出会い

昭和三十七年四月、私はK小学校からY小学校に転勤しました。当時三十歳を少し出た年齢で四歳と一歳の子育ての最中でした。

赴任したこの学校が、本当の意味で教師としての出発点でした。と言うのは、児童の実態は想像もつかない程すさまじく、全校「授業が成立しない」有さまでした。教職員一同頭を抱える毎日でした。「何とかしなければ」とその原因の解明と、父母との話し合いを重ね、全校で「生活指導」に先ず取り組みました。一つの目標に向かい、共に学び理解し合う実践から、Y小学校の教師集団が形成されました。県内外の実践校の見学や、自主的な公開授業に取り組みなど、研修を重ねました。



遠藤静江さん（2004年5月16日、子どもまつりの会場にて撮影）



1992年5月17日の子どもまつりにて。左が遠藤静江さん（写真提供：遠藤静江）

た。学生と共にその壁を乗り越える努力をしました。子どもまつり実行委員会は、夏冬休みを除いて、毎週金曜日の夜七時半から九時、十時まで、文化会館やふるさと会館で会を持っていきます。年度当初は、先ず、子どもまつりの意義目的から始めます。受け継ぎ受け渡される熱のこもった討議、一年生の新実行委員の姿が新鮮で印象的で、「今年もやるぞ」という元気を私たちに授けてくれます。

学生を中心とした事務局態勢、企画、渉外情宣、会計局による提案、討議、更に見直し再提案と粘り強い会議が続きます。高校生の様な可愛かった学生が、この子どもまつり実委（実行委員）を通して、卒業する時は、驚く程の成長を見せてくれます。都留にいつまでもいて欲しいと言う思いにかられます。

五月の第三日曜日この一日。子どもたちの輝く瞳に出会うための実委の陰の力は、なかなか市民には見えません。多くの団体や個人の皆様にぜひ実委への参加をお願いします。

子どもまつりの地域への広がりと共に、さらに、地域の人たちと直にじっくり話し合いたいと第十三回子どもまつりの関連企画として、「都留の教育を語る集い」を実施してきました。六回続けました。その間大田堯先生、丸山康雄先生、福田誠治先生、湯山厚先生、三井須美子先生、田中孝彦先生には講演や助言者として、お力になっていただきました。学生にとって、地域の多勢の人たちとの交流は、子ども理解の上からも、大きな意義がありました。

また、当時都留市には、映画館も劇場もありませんでした。子どもたちを本物の芸術にふれさせ、感動を

共有し、情緒豊かに育って欲しいという願いから、第十五回子どもまつりのやはり関連企画として、人形劇団ブークや、藤城清治とジュヌパントルなど招き、芸術鑑賞会も実施してきました。事務局や市民、学生の実委は、チケットの普及に奔走しました。雨の日など傘を手に、町の隅々まで戸別訪問をしました。然しうぐいすホールが出来、子どもたちの状況も変化し、チケットは捌けず、赤字を出し、とうとう十六回で中止しました。

思えば三十五年を継続してきたこのエネルギーはどこからくるのでしょうか。第十六回事務局長の片岡為世君が都留を去る時、「都留には、特別な施設も娯楽もないのが良かった。それが俺をつる子どもまつりに熱中させたし、市民との交流を深めてくれた。自分の子どもが進学するしたら、都留大だよ」と、語ったのです。うれしい言葉でした。淡路島出身の彼の家には、結婚式への招待をふくめて三回訪れました。現在家族ぐるみの付き合いです。また、子どもまつりの「く」企画へ私たち「都留詩友会」も参加してきました。学生の実委からの入会者も多く新鮮な詩や、若い活力が、「都留詩友会」を支えてくれています。

おわりに

長い交流の中では、病気になった学生や、交通事故で入院した学生もいました。また、年の暮れを都留で越す学生などがあります。微力ながら、力になってあげたいと心がけています。

文教都市都留にとって学生は「宝」です。

えんどう しずえ（元小学校教諭・都留詩友会会長）

その頃、日教組の第十一次教研集会に参加した教師たちの有志から、全国幼児教育研究協議会（会長羽仁説子氏）を立ち上げました。人間形成の基盤となる幼年期の重要性を痛感し、私も参加しました。学ぶ中で、幼保小の先生方が手を結ぶことの大切さを知り、富士幼年教育研究会を発足させました。この研究会では、大田堯元学長や、諸先生には講演会等を通して、お力になっていただきました。

Y小学校に九年間在職し、T小学校に転勤しました。当時日本列島改造論等、高度経済成長の真只中にあり、その事と相まって、子どもたちの発達も大きく変化してきていました。親と教師、地域みんなで手をつなぎ、共に子育てを考えていこうと母親と手を結び「ひまわりの会」をつくりました。その様な時、都留文科大学の児童文化研究部の学生が、「青空子ども会」（現在のつる子どもまつり）として、地域に一步を踏み出しました。昭和四十三年五月五日でした。学生が中心で立ち上げたこの活動の意義目的は、「子どもたちに地域の中で健やかな成長をとりあげて欲しい」というもので、私の考えと一致しました。

つる子どもまつりと共に

たった四年間、この都留文科大学に在学するだけの学生たちが、無報酬の活動をするのを市民のひとりとして、黙って見ている訳にはいかない。そんな思いが私を突き動かしました。さっそく実行委員として参加し、更に、富士幼年教育研究会も当日協力参加しました。

然しまだまだ当時は、行政も、教育界もこの様な民間の活動には理解を示してはくれないのが現状でした。

# 「つる子どもまつり」の喜びとこれからの課題

坂口隆子

「つる子どもまつり」は今年で三五年目を迎える団体です。「つる子どもまつり」という言葉だけなら知っている人もいると思います。その特徴は、学生と市民が協力し、「子どもの地域の中の健やかな成長」を願ってさまざまな活動をしてきたことにあります。五月の「つる子どもまつり」をはじめ、芸術鑑賞会、「都留の教育を語る集い」、「こがねっ子まつり」など、単なる子ども向けのイベント企画ではなく、「地域」というものを意識した企画を考えて実践してきました。私は、子どもと関わる事ができるといふことに惹かれて事務局に入りました。去年一年間は執行部（つる子どもまつり事務局をまとめる役）を務め、子どもまつりの良さや課題なども感じていました。

つる子どもまつり実行委員会の活動は週一回の話し合いが主体です。ここでは市民と学生とが意見を交わしながら企画を創っていきます。二〇年ほど前に会を運営する「事務局」ができてからは事務局が草案をつくり、それを基に話し合うというスタイルが定着してきました。

しかし最近では、実行委員の意識の温度差とそれに伴う実行委員会離れが問題視され始めています。それ

（次ページへつづく）



が一つ目の課題です。意識の温度差とは、何年間もつる子どもまつりに関わっている市民や一部上級生の意識と、現在の活動の主体である学生との意識の違いです。この子どもまつりに関わっているすべての人が「子どもたちに地域で健全な成長をとげてほしい」という「想い」に引きつけられて活動しているわけではありませぬ。なかには、純粹に子どもたちとふれあい仲良くなりたいから活動に関わっている、という学生もいます。意識の差により、実行委員会の雰囲気「合わない」という学生も出てきています。また、年々市民の方が離れる傾向があり（こちらの原因は、高齢化と仕事を抱えていて定期的に参加できないということが挙げられます）、話し合いの際は九割以上が学生です。

学生が九割も占める団体ではありませんが、私たちの活動にとって都留市民の方とともに企画を創ることは大切なことです。それを実感したのは昨年行った秋の企画「こがねっ子まつり」においてです。その年のこがねっ子まつりは、地域の人や子どもたちと実行委員とのつながりをつくる目的で行われました。当日は、市民の方が私たちの想像以上に子どもたちに対する工夫や気配りをして下さいました。たとえば、職業当てクイズでは仕事の道具をもってきて、実際に子どもたちに使わせてもらったり、日舞の小道具を用意して頂いたり、市民の方々と実際に企画を通して関わることができ、市民のパワーを感じました。市民の方の参加が少ない現状ですが、学生が市民ともっと交流できるような動きをつくっていかれたらと思います。

二つ目の課題は「事務局のつくった草案をたたいて企画を創る」という討議方法が、実行委員にとって

「自分の意見が反映されていない」、「意見が出しにくい雰囲気だ」などの声を生んでいることです。また、雰囲気上意見を人前で話すことが難しいという人もいます。会議を面白いものにするのは学生（特に新入生）にとつては難しいかもしれません。「意見を出すのなんて慣れたよ」という人もいますが、雰囲気を良くしていく工夫や努力は誰かにしてもらうのではなくそれぞれが努力してみんなで創るものではないでしょうか。現在、ワークショップの技法を取り入れるなどの試みがされています。

今年の九月二四日と二五日に、つる子どもまつりに関わってきた卒業生、市民の方と学生による「交流会」が行われました。交流会では子どもまつりの三〇年の歴史を学んだり、今の実行委員会の課題や実行委員が抱える悩み事について卒業生と話をができ、それまでの自分たちの活動を振り返る良い機会となりました。このとき参加した人が口々にしたこと、それは「この活動に関わって、色々な人に出会えたことが一番良かった」ということです。

私自身を振り返ると、実行委員会の会議の場にて色々な人に会うことが楽しみの一つになっていました。また、色々な人と知り合うことで議題に対して意見を言うことも苦手ではなくなってきました。「会」という場を通して新たな関係が生まれ、出会った仲間とともに「企画」を創り、互いに成長していくこと、このことにつる子どもまつりの魅力があり、それぞれにとつて何か得るものがあると思います。私自身、この活動に関わってきて市民の人や子どもたち、さまざまな経験をともにしてきた仲間に出会えたことは貴重な財産だと思っています。大学生生活を学生だけの世界

で過ごすのではなく、都留という地域に住み、都留市に暮らす人々に関わり、世界が広がっていききました。今年も一月に「こがねっ子まつり」という企画を行います。私にとつては現役最後の企画です。子どもまつりの抱える課題がすぐに解消されるわけではありませぬが、子どもまつりに関わることの喜びを、後輩たちをはじめ多くの人に伝えていかれたらと思います。

さかくち たかこ（本学社会学科三年）



# 全国学生児童文化運動の歩みと都留文科大の児童文化研究部

中村拓郎

## 一 戦後学生児童文化運動のはじまりと全教児連の結成

学生による児童文化運動は、戦前は、帝大セツルメント活動\*などの遺産がありますが、限られたものでした。戦後になって、教師や学生が「混乱した社会状態、荒廃した文化環境の子どもたちに明るい夢を与えよう」というスローガンのもとに、各地で活動を始めていきました。

一九五四年に全国教育系学生ゼミナール(全教ゼミ)第一回大会が開催され、そこで「児童文化活動、子ども会・セツル運動」の分科会が持たれました。ここで「現在悪い文化にさらされている子どもたちのために学生・先生・親と一緒に良い文化財を創造し普及しよう」というスローガンを掲げますが、五七年に全国的な情報交換のための連絡機関として全日本教育系大学児童文化連盟(全教児連)が発足しました。

## 二 全教児連の崩壊と全児連の結成

その後、全教児連内部では、安保闘争の評価をめぐる

\*一九三〇年代に東京帝国大学セツルメント児童部や託児部の活動があり、その実践や研究が機関誌『児童問題研究』に掲載された

# 児文研という活動を通して

廣井良徳

児童文化研究部(略して児文研)。なんだか堅苦しい名前ですよ。僕もはじめは、物々しい名前だなど思っていました。でも、やっていることは簡単。子どもと触れ合って、よい文化(児文研での用語で文化とは、子どもたちが見せる人形劇とか影絵、紙芝居、あるいは遊び、のように子どもたちに伝えたいことを指します)を伝えようということなのです。

具体的な活動は四つの班に分かれていて「影絵班・ほしこの」「文学班・碧空」「人形劇班・わたぼうし」「地域子ども会班・大きなかぶ」の四班があります。順を追って紹介していきたいと思います。

「影絵班」は影絵劇を中心に影のあてっこ等(キットネやイヌといった手影絵を見せて子どもに当てさせる)をしています。ただの白黒の影絵でなく、色セロファンを使うなど、とてもきれいな劇を見せています。「文学班」は月に二〜三回、一坪文庫活動『たんぽぽぶんこ』をしています。市民の方の協力のもとに、一坪文庫という小さな図書館を活動場所として読み聞かせなどの本の普及やあそびをしています。また、公演時は大きな紙芝居をします。「人形劇班」は創作の人形劇をやっています。人形、ストーリーなど、一からみんなで考えて削っていきます。「地域子ども会班」は都留市の緑町というところで週に一回子ども会を行っています。公演時にはあそびやダンスをします。



文学班による紙芝居 (写真提供: 廣井良徳)

り意見対立が起き、六三年に全教児連は実質崩壊することとなります。

民主的活動を望んだ学生らは金沢大に仮事務局を置き、安保闘争を総括し、全教児連の民主化を開始します。六四年に「全国学生児童文化会議」が結成され、六六年には全教児連の崩壊宣言と同時に再建準備協議会が結成されました。しかし当時、加盟サークル数は七二から三六へと激減していました。その後何度かの大会を経過し、七八年に、全国学生児童文化連盟(全児連) 結成大会を迎えることとなります。このときに全教児連時代の総括を行い、子どもたちをめぐる情勢をより重視し、「教育系」という語句を連盟の名称から外しました。

## 三 全児連のその後と現在

八〇年代、全児連は新学習指導要領の改悪、福祉教育の切り捨てなどの社会問題と闘ってきました。しかし学生の社会的問題への関心は薄れていき、「全国から集まってまでして学習会を行う意義が感じられない」などと言った理由から、八五年に結成当時から関わってきた茨城大などが脱盟したのを皮切りに、さまざまな大学が脱盟し、八八年時点では加盟大学数は五にまで減っていました。それから九〇年代前半には、唯一の福祉系大学であった日本福祉大、当時中心者であった京都教育大が脱盟し、都留大も九九年に脱盟しました。そして二〇〇〇年、埼玉大が脱盟したことで加盟サークルはゼロとなり、全児連は再び崩壊してしまします。

しかし翌年には、「これまでに培ってきた関係をなくすのは惜しい」として、規約を破棄して有志を中

こうして見ると子どもと触れ合っていることばかりの部活のように思えますが、見せるための練習や話し合いはやはり長い時間を割いています。そういったことにも、やはりサークル活動(部活動)の重要な要素があると思います。部員は長い時間を共にします。大変ですが、そのなかでもいろんなことを学んだり、他人の意見を取り入れるといったようなかけがえのない経験が出来ます。

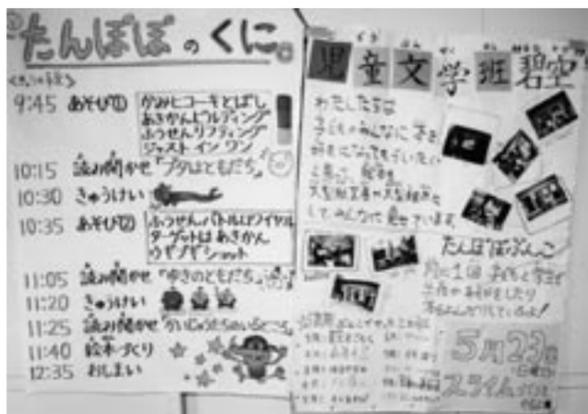
つらくても続けていけるのは、やはり子どもという存在が大きいからだと思えます。自分たちの練習してきたものを、子どもに見せることによって返ってくる、その笑顔や反応には何物にも替えがたいものがあると思います。たとえ、劇や見せるものの進行の妨げにな

心に再建しました。現在埼玉大を中心に都留・鎌倉女子・帝京・跡見学園女子・文京大といった大学が参加し、六月の新入生歓迎交流集会、九月の技術交流集会、そして三月の全国学生児童文化会議(三月大会)という三つの集会(大会)を行っています。

しかし、明確な活動意義を見出せないままの友情の集まりでは、すぐにまた存続の危機に晒されてしまいます。全国から仲間が集まるという大きな魅力を現代の児童文化運動にどう活かすか、過去を知りつつも過去に捕らわれない大きな決断が必要とされていると思います。

(上記の歴史については、児文研に残されている資料を基に執筆しました。)

なかむら たくろう(本学社会科学部三年・児童文化研究部)



2004年5月15日の子どもまつりにて

る反応や(劇中、敵役への非難などで役者の声が聞き取りづらくなる)こともあります。それも子どもが劇に入り込んでくれている証拠なのですが、生意気に思える子どもの言葉があっても、ふれあっている時間は、辛かったことやきつかったことにも意味があったと思いでしよう。これは、部員に共通する想

ひろい よしのり(本学社会科学部三年)

# 「つる子どもまつり」への協賛金の「こと」

佐藤隆

都留文科大教職員組合は、毎年「つる子どもまつり」に対して、ささやかですが協賛金を出しています。一体いつごろから協賛金を出すようになったのかは、よく調べてみないとわからないほど以前からのことで、組合の総会でも、「なぜ特別に協賛金を出すのか?」という疑問の発言が出るくらいです。

それでも、何となく多くの組合員がその社会的意義を直感しているようで、とくにつよい異論がでることもなく、「恒例」として承されてきています。職員組合としても、「つる子どもまつり」をもっとよく知らなければならぬ、と思っています。

さとう たかし(都留文科大教職員組合委員長)

# 「つる子どもまつり」の歴史に学ぶ

「つる子どもまつり」  
の歴史に学ぶ



顔にペイントした子どもたち  
(1987年5月、第18回つる子どもまつりにて)



芸術鑑賞 (1989年冬、歌舞劇団 田楽座「土・土・土のうた」。都留市谷村第一小学校体育館にて)

私と「つる子どもまつり」

望月育代

「ここは、ここは、こどもまつりのひろくば。ここは、ここは、みんなの広場・・・」ギターに合せて、都留大のグラウンドに集まった数百人の子どもたちと大学生、そして大人たちも一緒に楽しそうに歌っている・・・私が都留大生の頃の「つる子どもまつり」の一面です。私は在学中に第二〇回記念の子どもまつりをしましたが、早いもので今年は第三五回目となり、小学生の我が子と一緒に参加しました。

私は、都留大の学生だった四年間、つる子どもまつりの事務局員として活動しました。そのころは、一年間に大きな三つの行事に取り組んでいました。ひとつは、今も続いている五月の「つる子どもまつり」です。都留大生のさまざまなサークルと市民のサークルが参加して実行委員会を組み、四月から毎週、会議を開いて準備を取り組みました。当日の形態はそのころから変わっておらず、午前中は、さまざまなサークル・団体が「くに」と呼ばれる企画を運営し、子どもたちは自分の行きたい「くに(企画)」を回って楽しみます。年によって参加団体や企画の内容が変わることもありますが、どのサークルもそれぞれのふだんの活動を生かして子どもたちに伝えたい手作りの企画を行っていました。午後は、グラウンドに集まって「みんなのひろば」です。ふだんでは体験できないような多人数で、集団工作・集団あそび・ダンスを楽しみました。雨のため体育館で「みんなの広場」を行ったこともありま

す。そのころ、子どもたちが異年齢の集団で群れて遊ぶことが少なくなっているとされており、一年に一度でも集団で遊ぶダイナミックさや楽しさを感じ、それが日常の生活にもつながってほしい、そういう願いを込めて企画を考えていました。

二つ目は、「芸術鑑賞」です。そのころは今の様にビデオは普及しておらず、映画や劇などの文化芸術を見るには甲府か東京に出なければなりません。会場も、「うぐいすホール」のようないいホール(市民会館)ではなく、今の女性センターのところにあった古いものでした。そんな都留市で子どもたちと一緒に生の文化芸術に触れる機会を作ろうと取り組んだのが「芸術鑑賞」でした。市民会館や小学校の体育館を借りて、プロの人形劇や劇、影絵劇の公演を開催しながら、実行委員で一軒一軒訪問をしてチケットを売りながら、子どもまつりへの理解を広げてもらう取り組みもしました。チケット売りは大変でしたが、生の芸術を都留で見ることができた感動と、観賞後の「また見たい」「おもしろかった」などという感想に支えら



第18回つる子どもまつり (1987年5月)。  
雨のため体育館でおこなった「みんなの広場」

れていました。

三つ目は「都留の教育を語る集い」への取り組みでした。学生は子どもとふれあう経験が少なく、保護者や教師から子どもの話を聞きたいという思いがありました。また子どもたちを取り巻く問題を考えるとき、保護者や地域の大人と問題を共有し取り組んでいかないと子どもは変わらないのではないかと考え、学生と地域の大人とで子どもたちのことを話し合う会を持ちました。講師を呼んで講演してもらったり、分科会に別れて身近なテーマで話し合ったりしました。

振り返ると、毎週何度も集まって、ひとつひとつのことにこだわっていました。ある企画について話し合っていて、納得がいけないと夜中まで先輩と話しをしたこともあり、大学の専門分野よりも力を入れていた時期もありました。そこまでがんばれた最大の魅力は、多くのすてきな人々との出会いでした。「子どもによりよい文化を」という願いのもとに集ったさまざまな立場の人々との交流や連携で、たくさんの方を感じ学ぶことができました。このことは、今の自分の基盤の大きな部分を占めています。

時の流れとともに、芸術鑑賞や「教育を語る集い」はなくなり、今は別の企画を行っています。私も以前に比べ子どもまつりへの関わりが弱くなってきています。しかし、変わらない願いを大切にしながら、地域に住む大人の一人として、また教育に携わる者として、これからも「つる子どもまつり」が続くことを願い、多くの人と連携して私のできごとをしていきたいと思えます。

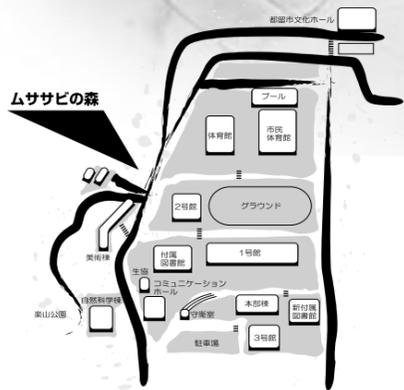
もちつき いくよ (東桂小学校教諭)  
写真提供・望月育代

# フィールド・ミュージアム 「ムササビの森づくり共同事業」はじまる



フィールド・ミュージアム部門では、キャンパスを自然と親しむ入口と考え、附属図書館ビオトープづくり（一六、一七頁参照）やキャンパスでムササビと出会う、ムササビの森づくりに取り組んできました。今年度から新たに、国際ソロプチミスト山梨「芙蓉」とともに、「ムササビの森づくり共同事業」に取り組みことになりました。この「ムササビの森」では、来年度から定期的に観察会を開催し、だれもが森の散策や動物たちとの出会いを楽しみ場所にしていきたいと考えています。

担当 今泉吉晴・北垣憲仁



11月12日、国際ソロプチミスト山梨「芙蓉」との打ち合わせ

「ムササビの森」は、本学の美術棟のそばにあり、これまでも環境・生態論ゼミの学生によるムササビ観察や野ネズミ観察がおこなわれてきました。昨年四月、地域交流研究センターが発足すると同時に、フィールド・ミュージアム部門ではこの森の調査をすすめてきました。すでにムササビがこの森に定着していること、ヤマハノキにムササビが利用しているとおもわれる洞（うろ）があることなどがわかっていきます。

この森は、おもにスギとヒノキの植林地です。戦後に植えられたものらしく、

樹齢はおよそ五〇年ほど。また、畑の跡を示す平らな土地もいたるところにあります。どれもが博物館の生きた資料として貴重な自然財産でしょう。

自然と親しむ拠点としてふさわしいこの森を、ムササビ研究や自然教育の施設として整備していこうと、フィールド・ミュージアム部門では今年度から国際ソロプチミスト山梨「芙蓉」と「ムササビの森づくり共同事業」に取り組みます。

同団体の前会長でもある浅沼和栄さんは、「この共同事業が、人間と自然との関係のあり方を考えるきっかけになっ

てほしい。また、地域の人にとっても楽しめる森になれば」と夢を語られました。あらかじめつくるのは、小道や観察ポイント、案内標識など基本的なしくみです。あとは、観察会の参加者といっしょに育っていく森、観察施設（巣箱や森の滑空コースなど）というふうを考えていきます。今後も森づくりの経過を定期的に報告していきます。

\*国際ソロプチミスト山梨「芙蓉」国際ソロプチミストは、一九二二年にアメリカで結成され、日本での会員は五三六クラブ約一万五千人。会の目的は、とくに女性の地位向上に努め、友愛と奉仕、国際理解と世界友好に貢献すること。

## 親しんでもらえる森づくり

磯崎由香

一月二〇日、まずは森のなかに遊歩道をつくる作業から取りかかりました。森のなかの手ごろなサイズの丸太を並べ、道をつくります。道の周辺の木も枝打ちをします。これは、ムササビが滑空しやすい空間をつくるためです。切り落とした枝は、細かく切って道に敷きつめました。葉を敷きつめた道は、一目で道

とわかるでしょうし、地面が適度な湿度を保つためモグラの食物となるミミズなどが暮らすようになるでしょう。

遊歩道づくりは、森のなかにある材料だけを使い、枝の一つも無駄にしません。これは、消費社会にいるわたしにとって大切な学びとなりました。ムササビを観察する場所は高台となっていて、「ムササビの森」全体が見渡せます。今後は、観察しやすい場所に巣箱もかけていきます。だれもが気軽にキャンパスの森を散策できる工夫に実地に取り組んでいきたいとおもいます。

いそぎき ゆか（本学社会科学科三年）

## 新たな発見がある森の作業

神戸絵里子

二月四日、「ムササビの森」で道をつくる作業に取り組みました。わたしは、おもにヒノキの葉を道に敷く作業を担当しました。「ヒノキの葉を少し擦ってごらん。香りがするでしょう」という先生の言葉に、さっそく葉を擦り試してみました。たしかに独特の香りがしました。

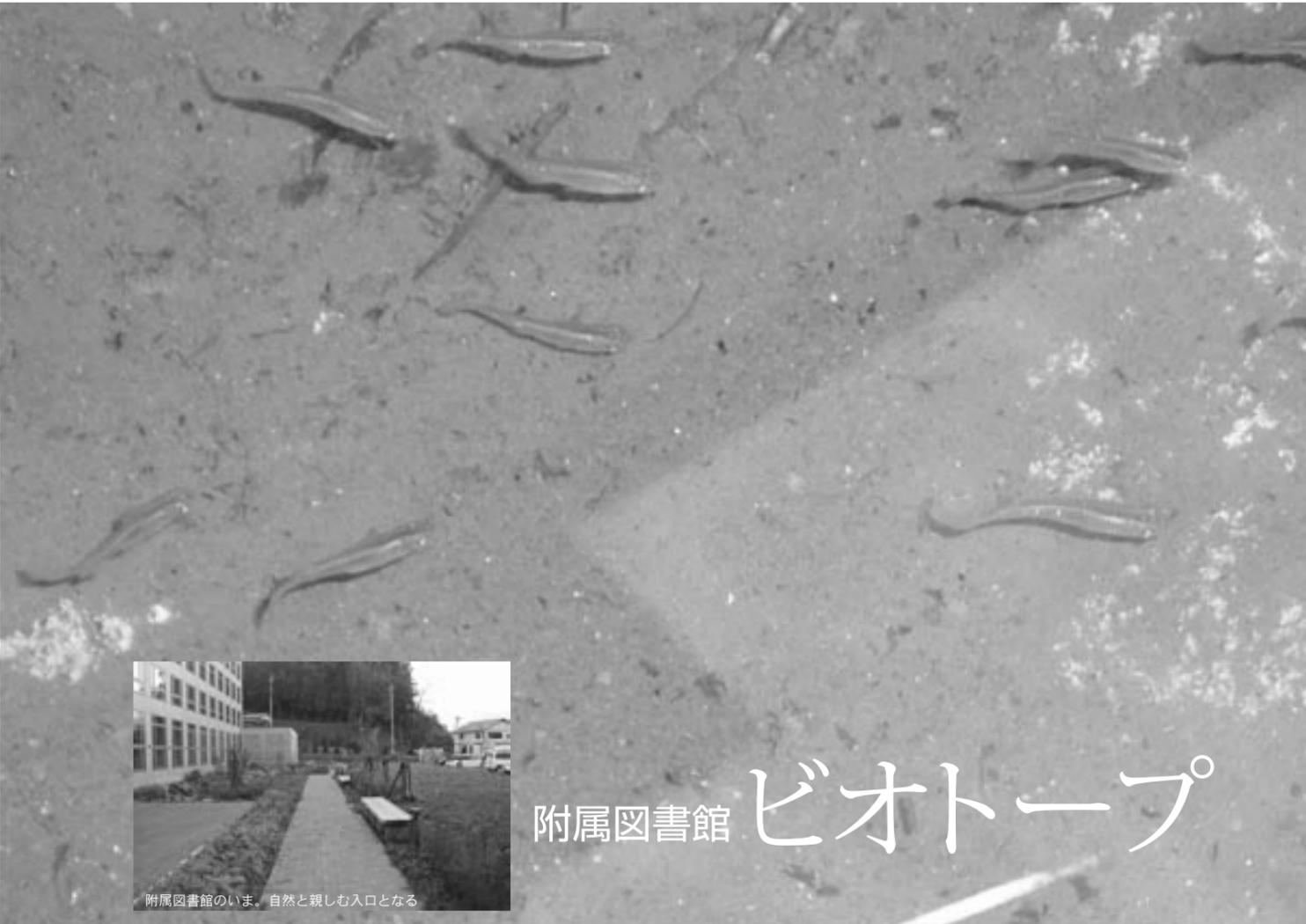
こうど えりこ（本学社会科学科三年）



枝打ちをし、森のなかの道をつくる（2004年12月4日）



道には枝打ちした葉を敷きつめる（2004年12月4日）



# 附属図書館 ビオトープ



附属図書館のいま。自然と親しむ入口となる

## 生きものとの交流を楽しむ拠点づくり

北垣憲仁

わたしたちの大学は豊かな自然に囲まれています。キャンパス自体は都会の大学に比べると緑が多いとはいえません。ふだんの生活でも自然と接する機会が少ないといえるでしょう。そこで、大学に新しく図書館（附属図書館）を設計するさい、図書館の読書環境を良好にするための外観の設計とあわせて、「生きもの回廊」のようなビオトープ（「生きもの生活場所」という意味）を構想しました。ビオトープの緑が、わたしたちの自然と親しむ入り口ともなり、本を読む環境づくりに貢献する、と考えたからです。

附属図書館のビオトープでは、チョウやトンボ、鳥など、この地域で誰もが親しめる動物と出会う空間をつくっていきます。これらの生きものと出会うようになれば、さまざまな生きものが暮らせる条件ができた、ということの意味します。今年の四月に附属図書館が開館した時点で、チョウが吸蜜に訪れるブッドレアや、景観を良好に保つためにカラタチなどの樹木を植えましたし、池をつくり、この地域にわずかに残ったメダカを入れました。これがビオトープの出发点です。

附属図書館のビオトープの世話



\*ビオトープづくりを支える「交流の広場」として「キャンパスの自然と親しむ会」をつくりました。その会報として『ビオトープ 瓦版』を発行することになりました。いつでもどなたでも入会できます。入会ご希望の方は、都留文科大 自然科学棟事務室か、e-mail: ktagaki@surugac.jp までお問い合わせください。

始めて半年が経過しました。花期の長いヒヤクニチソウには、夏から秋にかけてさまざまなチョウが訪れました。池ではメダカが数多くみられるようになり、産卵にやってきたトンボも観察できるようになりました。

今後なるべく自然の働きにまかせながら、また、学内外の多くの人のご理解をえながらビオトープづくりをすすめていきたいとおもいます。みなさんの参加とご協力をお願いいたします。



## 親しまれるビオトープを目指して

羽野幸

わたしがビオトープに興味をもったのは、高校生のころでした。大学生になってビオトープづくりに関わりたいと思っていたところに、附属図書館のビオトープを知り、環境・生態論ゼミを通じて、参加するようになりました。

ビオトープに関わって一番うれしかったことは、ビオトープに来た小さな子どもたちとの出会いです。裸足になって池で遊んでいるのを見て、思わず声をかけたくまりました。話しかけてみると、捕まえたミズカマキリを見せてくれました。大学生だけでなく、地域の人たちにも親しまれるビオトープになったのを実感できたひとときでした。

今後、もつともつとたくさんの人たちが足を運んでくれるような場所になって欲しいと思います。

はの さち (本学社会科学科三年)

## ビオトープは学びの場

加藤宏明

環境・生態論ゼミに所属するわたしは、今年の春から附属図書館のビオトープ整備に関わってきました。もつとも楽しみにしているのは池の観察です。

春にはたくさんのおタマジクシが見られ、夏には、池の周りを飛ぶオニヤンマやシオカラトンボなども観察できました。また、春に放流したわずか一〇匹ほどのメダカは、いまでは数え切れないほどにまで増えています。最近ではミズカマキリなどもやってきています。

そんな池に金魚が放されたこともありません。おそらく放した人は良かれと思って金魚を放したのでしょう。しかしこの規模の小さな池には、金魚は大きすぎます。池の生態系のバランスを大きく崩しかねません。

今後は、そうした理解もゆつくりと拡げていきたいとおもいます。

かとう ひろあき (本学社会科学科三年)

# 平成16年度 都留文科大学 現職教員教育講座

(2004年7月29日～31日)

## 教育実践は 子どもの声に 耳を傾けることから

福永美奈

三日間の現職教員教育講座に共通していたものは、「子どもの声に耳を傾ける」こと、あるいは「子どもの姿を理解し実践を作っていく」ということでした。

「キレる」「むかつく」子どもや、「学級崩壊」「少年犯罪」「学力低下」など子どもをめぐる問題が深刻化しています。この現状に対し「ダメな子どもを何とかしなくてはいけない」という意識では既存の秩序や大人の発想の枠に子どもを押し込めようとするところにつながり、このことが現在の子どもたちの困難をさらに根深いものにしていくというお話には、あらためて考えさせられるものがありました。私たちは問題を起こす子どもを「ダメな子ども」ではなく「自分探し」をしている子どもと捉え直してみることが大切なのではないでしょうか。



子ども理解と学習指導について、佐藤隆先生からは、「今何を学びたいか、主体者である子どもの声に耳を傾けて、子どものもつ個性的な課題に即して授業を作っていく。それを全体に返していく」ことが必要であるとのお話がありました。また、霜村三三先生からは、小学校一年生を担任するとき「子どもを見てはいるけれどもあまり手はかけすぎない。子どもの力を信じて、学びやかかわりを作っていくべきだ」と思っている。というお話がありました。子どものもっている力や思いをしっかりと受け止めた上で学習を作っていくなくてはならないと思えました。教室の中で一人ひとりの問いを引き出し実現していくためにも、安心

できる教室空間を作ること、子どもを理解することが大切だと思います。

子どもを理解する方法の一つとして「子ども理解のカンファレンス」「子ども理解と実践のカンファレンス」のお話が、田中孝彦先生、森博俊先生からありました。学校現場では、生徒指導部会などの場で困難を抱える子どもについての話し合いがなされてきました。そこでは子どもの「問題行動」にどのように対応し指導するかという視点が前面に出されていたと思います。カンファレンス(協議)では、問題行動だけを切り取るのではなく、子どもの生活の流れをとらえて子ども理解を深めていきます。子どもの思いを受け止めた上で、教育実践を作ろうとしていきます。そうすれば問題行動への対応も、既存の秩序を押し付けるだけではなく、子どもの気持ちの揺れや成長に付き合う援助となってくるのではないのでしょうか。

現場では、教師同士が十分に話しあう時間を確保するのが難しくなっています。それだけに、「対策会議」に終わることなく「子ども理解」から始められる、その時間と気持ちのゆとりをどのように作っていくかが大きな課題となっています。

ふくなが みな(都留文科大学大学院 臨床教育実践学専攻)

## 子ども理解を深めて いく協議(カンファ レンス)の大切さ

中村恵子

や背景も異なる様々なケースを抱え、悩みはつきません。

一学期の中頃、『都留文科大学現職教員教育講座』のリーフレットを見たとき、「子ども理解と教育実践」というテーマに興味を惹かれ、受講させていただきました。今回の講座では、『子ども理解のカンファレンス』に重点が置かれていたように思います。講師の先生方よりたくさん事例を通して具体的にわかりやすく教えていただき、とても勉強になりました。

今、本校では、生徒たちが落ち着いた学校生活を送っており、保健室利用についても良い状況が保たれていると思います。多くの生徒たちは、有り余るほどのエネルギーをもって、学習や部活動に取り組む、生き生きと学校生活を送っています。そんな生徒たちにも悩みがたくありません。友達関係のこと、勉強のこと、部活動のこと、からだのこと、その他諸々、保健室はまるでよろず相談室のようです。心のパワーがある生徒は、悩みながらも何とか切り抜け少しずつ立ち直っていきます。しかし中には心のパワーをなくしてしまうほどの困難を抱えている生徒もいます。そのような生徒たちとどう向き合っていくだろうか、どのような支援ができるのか、忙しい学校現場で日々の執務に追われながら、原因



あることに気づきました。

私たちが子どもと向き合うとき、まず、子どもを受容し共感的理解を深めるように努めます。しかし、自分一人では考えが行き詰まったり、判断をしかねるような事態に陥ることがあります。カンファレンスを行うことによって、より多くの情報を共有することができ今まで見えていなかったことや知らなかったことが明らかになり子ども理解が深まりました。教師の思いや、感じ方の違いに気づいたり、悩みを出し合うことによって、

教師同士の連帯感が深まったように感じます。また、『何とかしなければ』という焦りや思いこみから判断を誤りそうになったり、教師の固執した考え方で行き詰まってしまったときには、スクールカウンセラーの先生方から専門的な立場で示唆をいただくことができました。今後も継続的にカンファレンスを行い、より良い支援ができるように力量を高めて行ければと思います。

なかむら けいこ(東桂中学校 養護教諭)

# 「地域交流センター通信」を読んで 桂高校生の感想より

## 興味をもった記事と感想

本誌は、読者として高校生も想定して編集しているように思います。そこで桂高校にお願いし（九月）、生徒さんに「通信」の過去二号分を読んでもらい、感想や意見を書いていただくことにしました。二一九名の生徒さんが協力して下さいました。それぞれに高校生らしく率直に表現してくださいました。さまざまに示唆に富んでおり、これからの編集に生かしていきたいと思えます。先生方を含め、ご協力、ほんとうにありがとうございます。以下に、高校生の感想の一部を紹介します。（通信編集部）

「私が興味をもった記事は『右船神社のムササビ』についての記事です。私も旭日小学校出身で、小学校三年生のとき小口先生が担任でした。（中略）私も蝶が羽化する様子やモグラの行動の様子なども見たことがあります。そういう時間がとても楽しかったので、小口先生には、小学生にそういう時間をこれからもたくさんとってあげて欲しいと思います。応援してます」（二年生、女子）、「特集1の『地域に根ざす教育の創造へ』を読んで学習チューター制度の取り組みを初めて知りました。どのように大学生と小学生が触れ合っているのか、さらに具体的に知りたいです。」（三年生、女子）、「都留ツアーの記事を読ん



で、都留にはまだ私の知らない風景がたくさんあることを知りました。都留に住んで一六年になるのに知らないことがあるのに驚きました。」（一年生、女子）  
**読み易さ・読みにくさ・面白さ**  
 「全体的に読みやすかったと思う。写真があつて、文字がずらずら書いてないから。」（二年

生、女子）、「記事などは良かったのですが、非常に読みにくい」です。」（三年生、男子）、「外国の記事は面白いと思ったのもっと増やしていくといいと思う。」（二年生、女子）、「デザインはいいと思う。文化の特集は毎号見たい。できればカラーで見たい。」（二年生、女子）、「読めばわかりやすく書いてあるが、写真などをもう少し多くして、触れやすい文章にしてほしい。こんなことが行なわれているとは知らなかったので、びっくりした。」（一年生、男子）、「見た感じが難しそう。もろ大人向けの雰囲気がある。都留市内の学校の紹介などをすれば、高校生も読むかもしれない。子ども達の進路の悩みとかも、載せて欲しいと思う。」（二年生、女子）

## 編集への提案

「進路にいろいろ悩みのある高校生としては、せっかく都留文科大学が作成しているのだから、大学のことをいろいろ載せてもらえれば、と思います。」（学年、性別不明）、「イラストとか写真など、読者が参加できるコーナーがあれば、より良いと思う。」（学年、性別不明）、「学習チューターの記事は身近なものに感じた。もっと高校生にとって身近に思えるような記事内容だと楽しく読めると思う。」（二年生、男子）、「読んでみると共感できる点も驚く点も多くあったが、書いた人の感じたことだけでなく、どうすれば私たちも協力できるかを書いて欲しい。」（一年生、女子）

# トピックス

## 青年期の教育実践を語り合う

### 高校教諭と大学教員との合同研究会

西本勝美

八月四日の午後、山梨県立桂高等学校の校内研修会に、佐藤隆（初等教育学科）・畑潤（社会学科）・後藤道夫（初教）・西本勝美（初教）の四名の本学教員が参加しました。桂高校との連携は、この数年、さまざまな形でおこなわれていますが、この研修会は、年度当初から準備をすすめてきた新しい取り組みです。準備段階で重視したのは、高校教師と大学教員の「双方の意思を通わせる」ことで、性急に結論や処方箋を出すのではなく、それぞれの立場の違いや考えの違いを出し合い、お互いが理解と視野を広げるとともに、共有できる問題は何かを探っていくことを大事にしたいと考えました。

八月四日の午後、山梨県立桂高等学校の校内研修会に、佐藤隆（初等教育学科）・畑潤（社会学科）・後藤道夫（初教）・西本勝美（初教）の四名の本学教員が参加しました。桂高校との連携は、この数年、さまざまな形でおこなわれていますが、この研修会は、年度当初から準備をすすめてきた新しい取り組みです。準備段階で重視したのは、高校教師と大学教員の「双方の意思を通わせる」ことで、性急に結論や処方箋を出すのではなく、それぞれの立場の違いや考えの違いを出し合い、お互いが理解と視野を広げるとともに、共有できる問題は何かを探っていくことを大事にしたいと考えました。

者、都留にはまだ私の知らない風景がたくさんあることを知りました。都留に住んで一六年になるのに知らないことがあるのに驚きました。」（一年生、女子）  
**読み易さ・読みにくさ・面白さ**  
 「全体的に読みやすかったと思う。写真があつて、文字がずらずら書いてないから。」（二年

生、女子）、「記事などは良かったのですが、非常に読みにくい」です。」（三年生、男子）、「外国の記事は面白いと思ったのもっと増やしていくといいと思う。」（二年生、女子）、「デザインはいいと思う。文化の特集は毎号見たい。できればカラーで見たい。」（二年生、女子）、「読めばわかりやすく書いてあるが、写真などをもう少し多くして、触れやすい文章にしてほしい。こんなことが行なわれているとは知らなかったので、びっくりした。」（一年生、男子）、「見た感じが難しそう。もろ大人向けの雰囲気がある。都留市内の学校の紹介などをすれば、高校生も読むかもしれない。子ども達の進路の悩みとかも、載せて欲しいと思う。」（二年生、女子）

道徳性の発達のなとらえ方と大学での教育実践について発言しました。西本は高校教育における「対話」の重要性と、地域の「ごく普通の生徒」を預かる同校の意義について、問題提起的に発言しました。

## 「手応え」を感じた研修会

今回の研修会は、まだまだ「第一歩を踏み出した」段階ですが、このような場を継続的に持つことの意義に「手応え」を感じることができました。「高校教師と大学教員が教育問題について同じテーブルに着いて考え合う」という新しい「連携」の今後の展開に、おおいに期待したいと思えます。



今回のテーマは桂高校で力を

や、「地域の目」、保護

にしもと かつみ（本学初等教育学科教員）

# 十九年目を迎えた都留音楽祭

有村祐輔

「都留音楽祭」を知っていますか？夏の暑い盛りに毎年「うぐいすホール」で開かれている音楽祭がどのようなものかは知らなくても、市の広報などを通じて名前は見たことがあるの

ではないでしょうか。毎年一〇〇名前後の人々が全国から集まり、(時には海外からも)昼間は音楽の講習会、夜は各種コンサートが開かれるのです。音楽祭の中心が一般に



馴染みの薄い三〇〇〜四〇〇年昔のヨーロッパの古い音楽ということで敬遠されがちですが、ここ八年ほどは日本の古い音楽(三味線、尺八、篠笛)の講習や、小学生のためのリコーダー・アンサンブルなども開かれています。また夜の公開コンサートでは、ヨーロッパの古楽や古典邦楽に加えて、イラン、モンゴル、韓国など色々な東洋の民俗



芸能・音楽なども披露され、都留音楽祭を東西の音楽文化を結ぶものとして他に見えないユニークなものにしています。この音楽祭が始まったのは今から一八年前の一九八六年です。当時都留文科大で教えていた私は、その前年に完成した新音楽棟の立派な施設を目の当たりにして、ここを拠点に、全国に何かを発信することができるとは思いませんでした。そして、その「何か」とは、僕が長年研究してきたヨーロッパの古い音楽でした。大学当局をはじめ、多くの人々の賛同と協力を得て、第一回の都留音楽祭は一九八六年八月二日から二五日にかけて開かれました。北は北海道から南は九州まで、全国から古い音楽の魅力に惹か

れた仲間がこの都留市にやってきたのです。そして、都留の名前は音楽関係者の間で徐々に全国に広まっていきました。そして、一九九七年の第二回は、都留市当局の賛同を得て、その前年に完成した都留市音楽ホール(うぐいすホール)に拠点を移し、財団法人都留楽友会、日本古楽協会、都留音楽祭実行委員会主催という新しい体制のもとに音楽祭がはじまったのです。来年第二〇回目を迎える都留音楽祭はさらに充実した内容で、市民の皆様にもできる限り親しみやすい音楽祭にしていきたいと考えています。

ありむら ゆうすけ(都留音楽祭監督・都留文科大名誉教授)

# 読者の声

「地域交流センター通信」をあれがとっこさいます。表紙の写真が素晴らしいですね。田中孝彦さんも他の方々も、かつて「教育は死なず」と述べられたその志を、都留の大学づくりからじつくりと発信しているように感じます。小さな大学の大きな試み、大田(堯)先生にも嬉しく届くことでしょう。」(佐藤一子氏・東京大学大学院教授)

今、非常勤講師というスタイルで教育現場にいますが、都留で学んだこと、経験したことなどを、思い起こしたり、アレンジしたりしながら日々の教育活動に取り組んでいます。もっと深く、まじめに取り組んでいけばよかったですと後悔することもたびたびです。そし

て、毎日の教育活動のなかで思い悩んだときに、もう一度勉強したい!と思ったときに、安心して帰れる場所があるといいなあと思っていました。都留文の夏期講座は、現場のそのような想いを汲んで頂けるものだと思っています。今年の講座について、ホームページで確認しました。興味のあるテーマばかり。残念ながら出席できないのですが、次回以降には、是非という気持ちです。(大澤裕子氏・本学卒業生 東京都に在住)

「地域交流センター」の発足は、とても都留文らしくていいなあと思います。人々の毎日の生活の側にあり、地域に密着した活動というものを学生時代に経験できた、直接に参加はしなくても実例

をみるのが簡単にできる環境にあるということ。このことは、学生という立場を終え、いざ自分が働きだしたりしてから、自分の選択の可能性をふくらませたり、何かを知りたい、始めたい」というときに、ボンと背中を押してくれるきっかけになると思います。やっぱり、「少しでも経験している」「見知っている」と、「まったく知らない、ゼロから決断をする」のとは、戸惑ったり躊躇したりする度合いが違ってくるのではないのでしょうか。自分が大学生の時にこういうセンターがあったらよかったのになあと、ちょっとうらやましく思っていました。

また、都留を卒業している人たちで新しい生活をはじめても、この「地域交流センター」の

存在は、とても活用できるような、これからの卒業生にとっても、とても大きな存在になっていくのではないかと思います。なんだかんだで都留文の同級生は、卒業時の就職はきびしくても、そのあと教員に受かったり、公務員に受かったりして、また民間での転職もうまくやっていたりして、努力家というか、「自分の道」をしつかり築きあげている人が多くいます。

そういう卒業生たちが、また何か新たな発見をしたと思ったとき、「その気持ち」と「実際に知りたいたいこと」との橋渡しができるところが、この「交流センター」ではないかと思ったりしたので、(浦上千賀子氏・本学卒業生、長崎県諫早市在住)



## ●編集後記

○「つる子どもまつり」に光を当ててみました。1970年頃より日本各地で「子どもまつり」の実践が展開されていきましたが、その後どうなっているのでしょうか。35年も継続されている例は、おそらく教育・文化史や地域史の角度からも注目してよいことだと思います。

○この特集の編集過程では、過去のさまざまなことが一つにつながってきたような、不思議な経験がいくつもありました。たとえば、巻頭言を書かれた大田堯元学長は、児童文化研究会や都留自然博物館（フィールド・ミュージアム）構想についても発言してこられたのでした。

○「都留音楽祭」も19年という歴史をもち、貴重な文化交流の機会として成長を続けています。

○前号の編集後記で、「この通信の読者として〈高校生〉も想定している」と書きました。口先だけではダメだと考え、実際に高校生に読んでもらい感想・提案などを書いてもらいました。一つひとつ読んでいて、読者の声を聴くことの意味深さを感じることができました。

○次号は、下宿のことなど学生たちの地域生活を特集する予定です。全国から集まった学生の大半が、大学周辺で下宿（アパート）生活をしています。

○この通信は、送料を負担していただければ、どなたにも送付いたします。1号分は140円切手を、1年分（3号分）は、140円切手3枚を、センター宛にお送りください。（編集長 畑潤）

## ●センター掲示板

### 地域交流フォーラムの開催

地域交流センター主催の第1回「地域交流フォーラム」を、2005年2月26日（土）に開催することを予定しています。基調講演と討論とを骨組みにして、学内外の方の参加を得て、地域交流の意味や課題をじっくり考えあっていく場にしていこうと、検討・準備をすすめています。

絵：成瀬洋平（本学社会学科4年）

DTPアシスタント：清水亮

